



聖書は 物語る

一年12回で聖書を読む本

大頭 眞一 [著]

YOBEL,Inc.

はじめに

聖書を読み始める人は多いのですが、最後まで読み通す人は少ないようです。実は私もそのひとりでした。何度も読み始めては、途中で投げ出すということを繰り返してきました。牧師になってから、いろいろな方々とふれあう中で、少しずつその理由がわかるようになってきたように思います。それは、ひと言で言えば、聖書とは一体何であるかをつかみかねるから、ということになります。私たちは何かを読むとき、それがどのようなジャンルの書物であるかによって、読み方を変えます。企業の損益計算書を読むときには、数字や固有名詞のひとつひとつがたいへん大きな意味をもちます。けれども小説を読む場合には、細かい数字などは読み飛ばしても大きな影響はないのが普通です。

聖書は、本来どういうジャンルに属する書物であるのでしょうか。このことについて、キリスト教会の伝統にのっとり、しかもその内容をさらに明瞭に言い表す言葉が最近使われるようになりました。それは「物語」という言葉です。「物語」というとフィクションだと考えられやすいのですが、必ずしもそう決めてかかる必要はありません。たとえば、ひとりの人の人生もまた「物語」と見なすことができるからです。聖書を物語として読む立場を代表するような『神の物語』という本によると、物語とは「始まりがあり、主要な登場人物がおり、筋がある。各章ごとに、波乱と進展、どんでん返しがあがり、そして全体に意味を与えることになる結末がある」書物ということになります。中でも聖書は神が主人公である「神の物語」です。ですから、神という主人公が何を語り、いかに考え、どう行動するのかを読み取ることが、聖書の読み方の基本だと言うことができます。

こうして読むときに、聖書をつらぬくひとつの世界観が浮かび上がっ

この本を愛する明野キリスト教会の兄弟にささげます。

【凡例】

- *本文中では、新改訳聖書第3版を使用しています。
- *『神の物語』とあるのは、マイケル・ロダール著、大頭眞一訳『神の物語』2011年初版、2012年第2刷（日本聖化協力会出版委員会）、現在『神の物語』上・下（ヨベル新書、2017）を指しています。

本文に出でてくる地図や資料等がカラー版でご覧になれます。

「聖書は物語る」支援室 公開中

<https://bible12session.wordpress.com/>

（兵庫県立大学・地理情報学研究者：川向 肇氏提供）

いつものように関西聖書神学校の鎌野直人先生には多くの示唆をいただきました。また石黒則年先生の著書『旧約聖書あと一步』（キリスト新聞社、2011年）も大いに参考にさせていただきました。さらに第2版に際しては、前・聖学院大学総合研究所特任教授、現・日本基督教団河内長野教会牧師の松谷好明先生と関西学院大学の畠山保男教授のアドバイスを反映させていただきました。また第3版では、友人で兵庫県立大学の地理情報学の研究者川向 肇氏がすばらしい地図を作ってくださいました。ただし、内容の最終責任はもちろん著者にあります。

聖書を読むとき、私たちもまたこの「神の物語」に招かれています。いつのまにか、登場人物の一人のように、神に問われ、答え、決断を迫られることが起こります。あなたの「物語」がすばらしい物語、豊かに実を結ぶ物語となるように心から願っています。さあ、それではさっそく聖書を手にとって読み始めましょう。

2015年 春

大頭眞一

てきます。神が人との交わりを求めて、人を創造し、人の反抗にもかかわらず人をあきらめないで、最終的に人をはじめとする全被造物との間に愛の交わりを回復し、それを楽しむことになる。これがその世界観です。この大きな流れを頭に置いておくと、聖書がかなりスムーズに読めるようになります。

私たちの明野キリスト教会では、2012年の秋から「一年12回で聖書を読む会」という会を開いています。クリスチャンでない方々を対象に希望者をチラシで公募したところ、予想を上回る多くの方々が、毎月熱心に集ってくださいました。そして月一度の土曜日の午前中、上述の読み方に基づいて聖書を読んでいます。この会のテキストにヨベルの安田正人社長が関心をもってくださったことから生まれたのが、この本です。参加してくださった方々の感想や質問、また明野キリスト教会の伝道委員の方々の意見も多く取り入れさせていただいています。

また、この本は先ほどふれた『神の物語』の弟分のような本でもあります。『神の物語』は緻密な神学書ですが、そこにある考え方を、聖書を初めて読む方々のためにかみ砕いたのがこの本です。聖書の世界観は、時間の流れを重んじます。神は時間の流れの外にはありません。神は時間の流れの中に身を投じ、リアルタイムで人と関わり合います。人



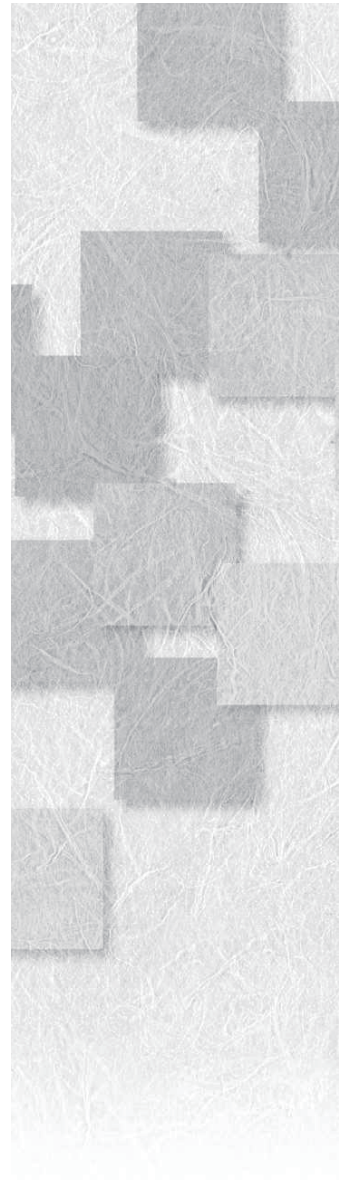
「一年12回で聖書を読む会」のようす

は神にとって、しばしば自由にならない存在です。なぜなら人間は自分の意志を持ち、神に協力することも、逆らうこともできるからです。神はそんな人間たちに手を差し伸べ、強制ではなく説得によって、私たちとのよりよい関係を築くために苦闘するのです。

聖書は物語る

一年 12 回で聖書を読む本

目次



旧約聖書の表記 (= 以下が略称)

創世記
出エジプト記
レビ記
民数記
申命記
ヨシュア記
士師記
ルツ記
サムエル記 第一 = I サムエル記
サムエル記 第二 = II サムエル記
列王記 第一 = I 列王記
列王記 第二 = II 列王記
歴代誌 第一 = I 歴代誌
歴代誌 第二 = II 歴代誌
エズラ記
ネヘミヤ記
エステル記
ヨブ記
詩篇
箴言
伝道者の書
雅歌
イザヤ書
エレミヤ書
哀歌
エゼキエル書
ダニエル書
ホセア書
ヨエル書
アモス書
オバデヤ書
ヨナ書
ミカ書
ナホム書
ハバクク書
ゼパニヤ書
ハガイ書
ゼカリヤ書
マラキ書

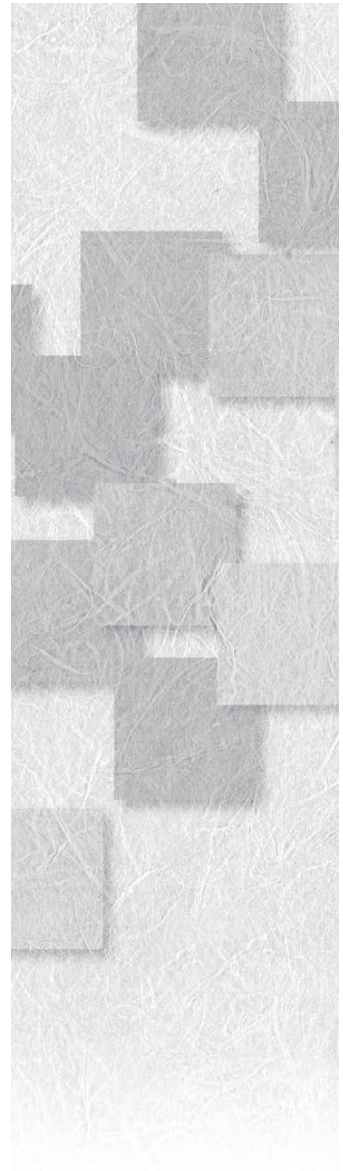
新約聖書の表記 (= 以下が略称)

マタイの福音書 = マタイ
マルコの福音書 = マルコ
ルカの福音書 = ルカ
ヨハネの福音書 = ヨハネ
使徒の働き = 使徒
ローマ人への手紙 = ローマ
コリント人への手紙 第一 = I コリント
コリント人への手紙 第二 = II コリント
ガラテヤ人への手紙 = ガラテヤ
エペソ人への手紙 = エペソ
ピリピ人への手紙 = ピリピ
コロサイ人への手紙 = コロサイ
テサロニケ人への手紙 第一 = I テサロニケ
テサロニケ人への手紙 第二 = II テサロニケ
テモテへの手紙 第一 = I テモテ
テモテへの手紙 第二 = II テモテ
テトスへの手紙 = テトス
ピレモンへの手紙 = ピレモン
ヘブル人への手紙 = ヘブル
ヤコブの手紙 = ヤコブ
ペテロの手紙 第一 = I ペテロ
ペテロの手紙 第二 = II ペテロ
ヨハネの手紙 第一 = I ヨハネ
ヨハネの手紙 第二 = II ヨハネ
ヨハネの手紙 第三 = III ヨハネ
ユダの手紙 = ユダ
ヨハネの黙示録 = 黙示録

表記例 = 創世記 22：7 は創世記 22 章 7 節、
詩篇 23：1 は詩篇 23 篇 1 節、マタイ 5：3
はマタイの福音書 5 章 3 節を表しています。

聖書は物語る

一年 12 回で聖書を読む本



はじめに	3
第 1 回 天地創造	10
第 2 回 アダムとその妻	20
第 3 回 族長たちの物語	27
第 4 回 出エジプトと十誡	39
第 5 回 王と神殿	45
第 6 回 預言者の叫び	52
第 7 回 来るべきメシア	57
第 8 回 詩歌と知恵文学	67
第 9 回 キリストの誕生	76
第 10 回 十字架と復活	85
第 11 回 教会の誕生	92
第 12 回 終わりのことがら	102
あとがき	109

れは人間にとって本質的な問題ではありません。人間にとって本当に大切なことは、創世記が文字にされたと言われる紀元前十数世紀であっても、21 世紀であっても同じはずです。聖書が扱うのはその本当に大切なことの方だと考えるのです。その大切なことを以下で見ることにします。

【聖書の技法】

あらゆる書き物は、銀行の ATM の監視カメラのようではありません。すべての登場人物の行為を取捨選択なしに描写するということはしないのです。そんなことをするなら、退屈で誰も読み終えることのできない膨大な文章がいつまでも続くことになります。だからあらゆる書き物は、情報を選択します。聖書もそうです。聖書もさまざまな技法を用いて、伝えようとすることを最も効果的に表現しようとしています。ですから、あるときには A という登場人物の立場から描くかと思えば、別のときには B という人物の視点で描きます。ときには、大胆にもものごとの起こる順序を入れ替えたりもします。それは事実を歪がめるというのではなく、できごとの本質を明確にするために効果的だからです。

たとえば、創世記 1 章と 2 章には明らかな矛盾があると言われることがあります。ここで創世記 2 章を朗読していただきましょう。いかがでしょうか。創造の順序が逆に見えませんか。表にしてみましょう。

表 1.1 創世記 1 章と 2 章の比較

創世記 1 章	創世記 2 章
第 1 日 光の創造	4 節 地と天の創造
第 2 日 大空の創造	7 節 男の創造
第 3 日 植物の創造	9 節 果樹、そしていのちの木と 善悪の知識の木の創造
第 4 日 太陽と月、星の創造	19 節 野の獣と空の鳥の創造
第 5 日 海や水の生き物、鳥の創造	22 節 人のパートナー（女）の創造
第 6 日 陸上動物、そして人間の創造	
第 7 日 休み	

創世記 1 章の創造は整然としたリストに見えます。まず生物が存在可能な環境が創造され、その後おおむね原始的な生物から高度な生物へと創造が進みます。それに対して、創世記 2 章ではまず男、それから果樹、獣、

第1回 天地創造

学びのポイント

- ・ 聖書は進化論など、科学と対立するのでしょうか。
あるいは、もっと異なる問題を論じているのでしょうか。
- ・ 聖書によれば、人の特別なところは何でしょうか。
- ・ 聖書によれば、人の存在の目的は何でしょうか。

【創世記1章】

聖書の第1ページ、創世記1章をお開きください。旧約聖書はヘブル語で書かれています。ほんの一部だけはアラム語です。日本語にも何種類かの翻訳聖書がありますが、このテキストでは新改訳聖書（第3版）を用いています。他にも新共同訳や口語訳といったいくつかの種類の翻訳があります。担当の方が朗読してくださいますので、お手許の聖書をご覧になりながらお聞きください。

【聖書と進化論】

いかがでしょうか。ここで、多くの人の頭をよぎるのは進化論ではないかと思います。神が文字通り6日間ですべてのものを造ったとするなら、進化論は否定されることになる。それは、非科学的ではないか！ 確かにクリスチャンの中には進化論を真っ向から否定する人々もいます。アメリカのケンタッキー州には創造博物館（Creation Museum. 下記URL参照）というのがあって、進化論を否定する展示をしているのだそうです。けれどもクリスチャンの中にはそのような主張に違和感をもつ人々もいます。聖書は科学書ではなく、神について書かれた書であると考えからです。科学知識や科学理論は、新しい発見でもあれば次々に更新されていきます。そ

れに似せて」(1:26) 人間を造りました。「われわれ」というのは、ヘブル語特有の「敬称の複数」とか「尊厳の複数」と呼ばれる用法とも言われています(例えば、シェークスピアの作品に登場する王たちは自分のことをWeと複数形で言います。ロイヤルWe〈王室の「我々」〉と呼ばれる用法ですが、これに似ています)。また、「われわれ」は、三位一体の神を表すという説もあります。人間のどこが神のかたちなのか、神に似ているのか、ということについては、意思や理性や感情といったさまざまなことがあげられるでしょうが、何よりも互いの中に愛し合うコミュニケーションが成立することが重要です。聖書の全巻を通して続く神と人の対話はそのことを示しています。

③愛のために造られた人間 神は被造物を喜び、愛する。人間も神に似せて、神を愛するように造られました。また、「男と女とに彼らを創造された」(1:27)とあります。人間はたがいに愛し合うためにも造られました。さらに、人間は他の被造物を愛するためにも造られました。「彼らが、海の魚、空の鳥、家畜、地のすべてのもの、地をはうすべてのものを支配するように」(1:26)。支配というのは搾取することではなく、神のように被造物をいたわりケアすることです。この点でも人間はじゅうぶんに責任を果たしてきたとはいえないようです。

【愛の物語 一創世記2章一】

創世記2章では、いってみれば宇宙から地球を捉えていたテレビカメラがどんどんズームインして、人に焦点を合わせる、そんな視点の移動が行われます。特にズームインされているのはさきほどの「③愛のために造られた人間」という点です。ここまでは、行動したり語ったりするのは神だけでした。ここからは、人が加わって行動し、そして愛し始めるのです。2章において、すべての被造物の中で人が最初に登場するのは、神の最大の関心がそこにあるからです。人の前には食べることを禁じられた木の実があります。人はその命令を守ります。神を愛し、信頼して、従うのです。また人には、パートナーが必要です。あらゆる動物が人のパートナーにふさわしくなかったことは、男女がたがいにとってどれほどかけがえのないパートナーであるかを語るものです。「それゆえ男はその父母を離れ、妻と結び合い、ふたりは一体となるのである。人とその妻は、

鳥と続いて最後に女と、まるで脈絡のない順序で並んでいるように見えます。何よりも、1章と2章に順序の異なる二つの創造が記されていることは整合性を欠くように見えますから、聖書はつじつまの合っていない書物だと考える人々もいます。あるいは、聖書は異なる起源を持ついくつかの記事を、不器用に混ぜ合わせたものだと考える人々もいます。

【神の物語 一創世記1章一】

けれども、この箇所は聖書の物語としての技法を示す最高の例であるといってもよいものです。聖書の主人公は神です。その主人公は最初から存在しています。そして1章が語るのは、この主人公が、明確な意図をもって創造を行ったということです。神の創造にはパターンがあります。「光があれ」(1:3) と言えば光が創造され、その結果は「良し」(1:4) とされます。神が意思をもって、自分のイメージ通りの創造を行う。このパターンが無生物から生物へ、生物の中でもだんだん高等な生物へと進んで、そのクライマックスとして人間が創造されます。人間の創造にあたっては、特別な言葉が使われています。「さあ人を造ろう。われわれのかたちとして、われわれに似せて。彼らが、海の魚、空の鳥、家畜、地のすべてのもの、地をはうすべてのものを支配するように」(1:26)。

こうして創造が完成すると、神はそれを「非常に良かった」とされました。神の満足、神の喜びがうかがえるように思える表現です。これらのことから、創世記1章が表現しようとしていることを、いくつか挙げてみます。

①**神にとって人間は特別な被造物** 「さあ人を造ろう」(1:26) には神の特別な意気込みがうかがえます。神にとって、人間は特別な被造物です。特別な目的のために造られた特別な存在です。ですから聖書によれば、すべての人には存在理由があります。その人が何をなしとげたかという功績とは関係なく、存在するだけで意味があるのです。神が喜びをもって造ったからです。そして造られたばかりで、まだ何もしていない人を「良し」としたからです。そのことを知るなら虚無感に陥ることは決してない、そう聖書は主張しているのです。

②**神に似せて造られた人間** 神は「われわれのかたちとして、われわ



図 1.1 聖書の舞台

コラム1 神の呼び名

新改訳聖書の旧約聖書で、主と太字で記してあるところは YHWH (ヘブル語をラテン文字に置き換えて表記) という神の名を訳したものです。ヘブル語のアルファベットには母音がありません。例えば H は、ハ・ヒ・フ・ヘ・ホのいずれにも発音可能なのです。一方イスラエル人たちは十誡の第三誡をそのまま守って、YHWH を発音しないで、代わりにアドナイ (わが主) と読み換えていました。母音記号が導入されたとき、アドナイにつける母音記号を YHWH につけると YeHoWaH (イエホワ→エホバ) になります。かつては文語訳聖書にはエホバと記されていましたが、研究の成果により現在では、YHWH 「ヤハウエ」と読むと推定されています。

【年表】

ここで聖書に関連する主なできごとの年表を掲げておきます。

表 1.2 聖書の主な出来事 (年表)

年代	できごと	聖書の箇所
【旧約時代】		

ふたりとも裸であったが、互いに恥ずかしいと思わなかった」(2:24～25)とあるのは結婚が神聖であることを宣言する箇所です。

「ふたりとも裸であったが、互いに恥ずかしいと思わなかった」とあるのは、性的な関係も含んだ互いの関係が健やかであったことを暗示しています。聖書が肉体や性を汚れたものとみなしていないこともまた見のがしてはならないでしょう。古来からある「二元論」(物質を悪、精神を善とみなし、いたずらに禁欲を奨励するような思想)は聖書の中にはありません。神が造られたものはすべてよいものです。肉体も性も本来、善なるものなのです。

なお、「男から取ったあばら骨から女が造られた」というこの箇所は男女差別に結びつく箇所ではなく、むしろ「互い」の関係の密接さを物語っていると読むべきでしょう。「これこそ、今や、私の骨からの骨、私の肉からの肉。これを女と名づけよう。これは男から取られたのだから」(2:23)は史上最古のラブ・ソングと呼ばれるところです。

最初の人の名前の「アダム」(3:21)というのは、実は固有名詞ではなく、ヘブル語で「人」を意味する普通名詞であることも心にとめておいてください。互いに愛し合いつつ、共に生きることの大切さは、すべての人にあてはまると、読むこともできます。

【聖書の成立】

第一回の「聖書を読む会」、いかがでしたでしょうか。お気づきになったと思いますが、聖書の成立の年代や経緯については、話しませんでした。諸説があるということ、特にクリスチャンか否かによって大きく見解が分かれることが、その理由のひとつですが、それとともに、最終的に成立した現在の形の聖書が何を語っているかを読むことが今回のコースの目的だからです。最小限、必要な背景については、おいおい触れることにしたいと思います。次回は創世記3章を読むことにしましょう。

【聖書の舞台】

簡単な地図で聖書の舞台を確認しておきましょう。

53 年から	パウロの第三次伝道旅行（ガラテヤ・アジア・ギリシャ）。	使徒 18 章～
60 年	パウロ、ローマに到着。	使徒 28 章
70 年	ユダヤ、ローマに反乱し鎮圧される。エルサレム陥落。神殿も徹底的に破壊。	

【旧約聖書の概要】 *旧約聖書 39 巻の概要を一覧表にしました。

表 1.3 旧約聖書 39 巻内容一覧表

五書 (律法)	創世記	天地創造、カインとアベル、ノアの洪水、バベルの塔などに続き、アブラハム、イサク、ヤコブたち族長の物語、そしてヨセフがエジプトに売られ、一族がエジプトに移り住むまで。
	出エジプト記	モーセに率いられたイスラエル 12 部族のエジプト脱出から、シナイ山での十誡授与、神の幕屋の建設。
	レビ記	ヤハウェがイスラエルの神であり、イスラエルがヤハウェの民であるための、守るべき戒律集。
	民数記	「出エジプト記」の続編ともいえるべき書。イスラエルは、不信仰と不従順のため挫折を繰り返しながら、荒野を 40 年さすらいつつ、約束の地カナンへ進んでいく。
	申命記	カナンを目前にしたモーセの、民への決別のメッセージと死。
歴史書	ヨシュア記	モーセの後継者ヨシュアがイスラエルを率いて、エリコの町をはじめ、カナンの全土を占領し、それを 12 の領地に分割して行く。
	士師記	「士師」すなわち、王制成立以前の英雄たちとその時代の記録。
	ルツ記	異民族モアブの女ルツが、ダビデ家の祖先と結婚するまでを記した、士師記の時代のサイドストーリー。
	サムエル記第一	神が預言者サムエルをとおしてサウルを王位につけ、イスラエルが王制に移行する。その後、羊飼いだビデが王となる。
	サムエル記第二	ダビデ王の時代、ダビデの罪と回復。
	列王記第一	ダビデの治世の終わりからソロモンの黄金時代を経て、王国の分裂時代を描く。

紀元前 2050年頃	アブラム（アブラハム）カナンを目指す。	創世記12章～
1900年頃	ヤコブ（イスラエル）、兄から逃亡し、後に帰還。	創世記28章～
1800年頃	ヨセフ、エジプトの宰相となり、家族を飢饉から救う。	創世記37章
1440年頃	モーセ、イスラエルを率いて出エジプト。	出エジプト記
1400年頃	ヨシュア、イスラエルを率いてカナン侵入。	ヨシュア記
1250年頃	このころからイスラエルは混乱と停滞の時代。	士師記
1050年頃	イスラエルに王制始まる。初代の王はサウル。	Iサムエル記9章～
1000年頃	ダビデ、第2代の王になる。第3代はソロモン。王国絶頂へ。	IIサムエル記1章～
930年頃	王国、北イスラエルと南ユダに分裂。	I列王記12章～
850年頃	預言者エリヤ、悪王アハブと対決。預言者たち活躍の時代。	I列王記17章～
722年	北王国イスラエル、アッシリヤに滅ぼされる。	II列王記17章～
616年	アッシリヤ、バビロン帝国に滅ぼされる。	
587年	首都エルサレム陥落。南王国ユダ、バビロン捕囚に。	II列王記25章～
539年	バビロン、ペルシャに征服される。	
537年頃	捕囚から南ユダへの帰還が始まる。神殿の再建。	ネヘミヤ記・エズラ記
【中間時代】		
331年頃	マケドニアのアレクサンドロス大王、ペルシャを滅ぼす。	
300年頃	ユダヤ、プトレマイオス朝エジプトの支配下に入る。	
200年頃	ユダヤ、セレウコス朝シリアの支配下に入る。	
150年頃	マカベア家、ユダヤを率いて反乱、独立を勝ちとる。	
63年頃	ローマ、エルサレムを占拠。	
【新約時代】		
紀元前4年頃	イエス・キリストの誕生。	マタイ、ルカの福音書
紀元30年頃	イエス・キリスト、働きの開始。	各福音書
33年頃	イエス・キリストの十字架と復活。	各福音書
48年から	パウロの第一次伝道旅行（キプロス・ガラテヤ）。	使徒13章～
49年から	パウロの第二次伝道旅行（ガラテヤ・アジア・ギリシャ）。	使徒15章～

預言書	エゼキエル書	紀元前 597 年、バビロン捕囚に連行された 1 万人の民の中に預言者エゼキエルがいた。情熱あふれる預言で、捕囚は短期間であるという偽りの希望を廃し、本当の希望は神と共にあることを語る。難解な書でもある。
	ダニエル書	バビロン捕囚中にネブカデネザルの宮殿で活躍した預言者ダニエルの生涯と預言。終末論的な趣をもつ。
	ホセア書	紀元前 8 世紀、北王国イスラエルの預言者ホセアによる預言。不貞の妻との関わりをとおして神の愛と痛みを知った者の心の叫び。
	ヨエル書	南ユダの預言者ヨエルの年代は不明。悔い改めへの呼びかけが語られている。
	アモス書	祭司ではない預言者アモスはユダの出身だが、北王国イスラエルに派遣され、紀元前 8 世紀の社会の墮落に警告。
	オバデヤ書	章のない、旧約中一番小さい書。エドム滅亡を預言。
	ヨナ書	アッシリヤの首都ニネベに海外宣教を行う預言者ヨナ。フィクションなのかノンフィクションなのか。いずれにしても全世界に向けられた神の関心を語る。
	ミカ書	紀元前 8 世紀のユダの預言者ミカが南北両王国に預言。不正を非難すると共に、エルサレムが世界の中心となりベツレヘムに偉大なダビデが誕生することを告げる。
	ナホム書	アッシリヤの首都ニネベの滅亡を預言。
	ハバクク書	紀元前 7 世紀後半のハバククが神の民が苦しみ、邪悪な国民が安全であるという現実を論じる。
	ゼパニヤ書	紀元前 7 世紀後半、王家の出身の預言者ゼパニヤがユダに対して警告を発する。
	ハガイ書	紀元前 520 年、捕囚後帰還したユダヤ人たちの神殿再建を励ましたハガイの預言。
	ゼカリヤ書	紀元前 520—518 年、捕囚後帰還したユダヤ人たちの神殿再建を励ましたゼカリヤの預言。
	マラキ書	紀元前 450 年前後のマラキの預言。神の定めた標準と礼拝の回復を訴える。

*新約聖書の概要は 100 頁、表 11.2 にあります。

歴史書	列王記第二	両王国の崩壊から、紀元前 722 年のサマリヤ陥落、587 年のエルサレム陥落にいたるまで。
	歴代誌第一	サムエル記や列王記を前提に、独自の歴史観を展開。サウルとダビデの時代。
	歴代誌第二	ソロモンの治世。王国分裂後は南王国ユダを描く。エルサレムの陥落までとクロス王による解放の宣言。
	エズラ記	バビロン捕囚後の時代を伝える。バビロンからの帰還、ソロモン神殿の再建が記されている。
	ネヘミヤ記	「エズラ記」とともにバビロン捕囚後の時代。ペルシア帝国の官吏としてエルサレムを訪れたネヘミヤによる“回想”の体裁で、神殿の再建と律法による共同体の再生を描く。
	エステル記	アケメネス朝ペルシア帝国の王妃となったエステルが同胞のイスラエル 2 支族の危機を救う。プリム祭の起源。
詩歌 と 知恵文学	ヨブ記	古代の族長ヨブは罪がないのに苦しみにあう。「正しい人をなぜ神は苦しみにあわせるのか」という問題に正面から取り組む特色ある書。
	詩篇	紀元前 10 世紀から紀元前 2 世紀頃までの約 800 年の間に歌われてきた神への感謝・喜び・嘆き等人間の感情と経験の全容を表現した詩 150 篇。
	箴言	ヘブライ版ことわざ集。神と人との関係のあり方や人生の目的、生きるための指針を集めている。
	伝道者の書	人間の生と死、神と人との関係を模索する。
	雅歌	男女の愛を主題とした一連の叙情詩。伝統的には神とイスラエルの愛、あるいは神とキリスト教会の愛をあらわすとされてきた。
預言書	イザヤ書	イザヤは紀元前 8 世紀のエルサレムの預言者。当時の社会、宗教、政治を鋭く糾弾、批判。古代イスラエル王国の滅亡と回復、メシアの再臨が主題。
	エレミヤ書	エレミヤは紀元前 7 世紀のユダの預言者。エルサレム陥落後もとどまり、最後はエジプトで生涯を閉じた。暗い時代に嘆きと同時に希望を失わずに語り続けた。エゼキエルやダニエルと同時代に活躍。
	哀歌	エルサレムの陥落と神殿破壊を嘆く作者不明の歌。

表 2.1 「女とへびの会話」と「神がほんとうに言ったこと」

女とへびの会話	神がほんとうに言ったこと
<p>3：1 「あなたがたは、<u>園のどんな木からも食べてはならない</u>、と神は、ほんとうに言われたのですか。」</p> <p>3：2 「私たちは、園にある木の実を食べてよいのです。」</p> <p>3：3 しかし、<u>園の中央にある木の实について</u>、神は、『あなたがたは、それを食べてはならない。<u>それに触れてもいけない。あなたがたが死ぬといけないからだ</u>』と仰せになりました。」</p> <p>3：4 「<u>あなたがたは決して死にません。</u>」</p> <p>3：5 あなたがたがそれを食べるその時、あなたがたの目が開け、<u>あなたがたが神のようになり</u>、善悪を知るようになることを神は知っているのです。」</p>	<p>2：16 「あなたは、<u>園のどの木からでも思いのまま食べてよい。</u>」</p> <p>2：17 しかし、<u>善悪の知識の木からは取って食べてはならない。それを取って食べる時、あなたは必ず死ぬ。</u>」</p>

表 2.1 の下線部に注目してください。へびは「神がほんとうに言ったこと」を正確に知った上で、それを言い換えました。「どの木からでも思いのまま食べてよい」(2：16) をわざと「どんな木からも食べてはならない」(3：1) と言い変えて、「ほんとうに言われたのですか」と質問しました。この言い換えは「やかましく干渉する神」というイメージを女に植え付けようとするものだったのでしょう。それは功を奏したようです。今まで完全に信頼していた神に対して、女はふと疑いの始まりのような

第2回 アダムとその妻

学びのポイント

- ・ 聖書によれば、人が善に傾くか、悪に傾くかは、何にかかっているのでしょうか。
- ・ 罪の本質とは何でしょうか。
- ・ 全能の神が、神に反逆する力を持つ人間を造ったのはなぜでしょうか。
- ・ 人に裏切られた神は、どのように行動したのでしょうか。

【創世記3章】

では今日の箇所、創世記3章を朗読していただきます。3章では、非常に良かった世界に悪が入りこみます。この後聖書を読み進む上でたいへん重要なところですので、ていねいに見ていきましょう。

【ハネムーンの終わり】

へびの登場は突然です。このことは人を悪へと誘う力が実際に存在すること、けれどもその起源は私たちには知らされていないことを示しているようです。このへびは被造物です。前回読んだ創世記1章31節には「神はお造りになったすべてのものを見られた。見よ。それは非常に良かった」とありました。へびは非常に良かったはずの被造物のひとつです。それなのに人を誘惑します。このことは、すべての被造物は、善にも悪にも傾きうる存在であることを語っています。人についても同じことが言えます。では人が善に傾くか、悪に傾くかを決めるのは何でしょうか。女とへびとの会話から、そのヒントを探してみましょう。女とへびの会話、そしてそこで問題になった「神がほんとうに言ったこと」を表にしてみました。